

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『吾輩は猫である』 夏目漱石 著

「吾輩は猫である。名前はまだない。どこで生れたかほとんど見当がつかぬ。」

この一冊は文豪 夏目漱石が、俳人高浜虚子のすすめで、「ホトトギス」に11回にわたって掲載した。最初の長編小説で、明治38年に一部を発表し、明治39年8月に完結しています。夏目漱石の名を一躍高めた代表作で、今なお共感を呼び愛されています。

村上輝和



熊本県文化協会では「NPO法人くまもと漱石文化推進会」を設立し、「9日読書会」や、レシビ発表会など、さまざまな事業を展開しております。一匹の猫を主人公に、猫の目を通して、苦沙弥先生の居にあつまる、迷亭、寒月、東風、独仙、三平等を、風刺とユーモアで描いています。猫は人間界とは一定の距離を置いて生活していますが、新聞記者気取り、演説口調、友人との交じり、交際を、客観的な視点から、人間界を馬鹿にするような発言や、軽視するような発言を描いていますが、人間賛歌への愛着が垣間見られます。そこには、漱石の幼少期の数奇な生い立ちが感じられます。漱石は慶応3年2月9日、東京新宿区で生れ、生後4ヶ月で里子に出され、一歳の時には父親の友人に養子に出され、9歳の時に、生家に戻るものの、夏目家への復籍は21歳になってからです。漱石は、短期間で、多数の素晴らしい小説を執筆していますが、絶えず体調(胃潰瘍)に悩まされ続けております。又漱石は明治29年4月、熊本の第五高等学校の英語教師として赴任し、4年3ヶ月を熊本で過ごしました。それから、当時の文部省の国費留学生第一号として、イギリスに留学し、明治36年1月に帰国し、第一高等学校に任ぜられ、東京帝国大学講師も兼務しました。明治40年には学者の道を辞めて、小説家として執筆活動を行ない、大正5年12月9日に胃潰瘍で永眠しました。

猫の結末は、ビールを飲んで、大きな水瓶に落ち、「ありがたい、ありがたい」と南無阿弥陀仏を唱え、生きることを諦め、深く水瓶の中で死んでしまいます。結びになりますが、当時の社会や、文明の進歩に対して、暗い、絶望的な感慨がこめられているものと思われ、社会に対する哀感を感じとられる最後です。



(熊本県文化協会会長)